

# 医史学と私

山崎 正寿

漢方京口門診療所

古く伝統のある日本医史学会で数々の実績を残されている諸先輩会員の中で、私のような新参の会員が「医史学と私」というようなテーマで一文を認めるのは些か口幅ったい思いであるが、原稿を書くことを勧めいただいた町泉寿郎先生のお気持ちは新参者でも新鮮な医史学への気持ちを述べてみよとの勝手な解釈をして拙文を記すこととした。

私は医史学の分野でも漢方医学や鍼灸医学に関わってきた者で、医史学会に入会したきっかけは故大塚恭男先生によるのであった。ある時漢方医学の中国の古典の「東垣十種医書」を神田の古書店で求め持ち歩いていたら、大塚先生が「君、是非医史学会に入会しなさい」と言われ、あれよあれよという間に順天堂大学の医史学会事務局に連行され入会の署名をさせられた。

入会したもののこれといったテーマも見つからず、当時金沢の病院で仕事をしていて、これも古い医史学会会員の故多留淳文先生から、先人の遺跡を調べようと言って各地の墓地を訪ね歩いた。当時住まいしていた金沢市の野田山墓地は加賀百万石の領主前田家の墓所であり、その中に前田家の藩医となった吉益北洲の墓もあった。当時は北洲についてはよく知らなかったが、後に深く関わって研究した吉益東洞の長子吉益南涯の嗣子であった。吉益東洞は私の郷里広島県出身の日本漢方の英傑であったので、北洲の墓には何かしら郷愁を感じた。その他にも京都に学会などで出かけたときに、大徳寺にある曲直瀬正淋の墓所を訪ねた。寺の僧侶に墓所にある曲直瀬正淋の墓に案内してもらったが、墓名が風雨にさらされて読むことができなかった。僧侶の指摘のままに信ずるほかなかったが、多留先生とともに墓石は立派なも

のであるが本当かなと言いつつ。そして寺から帰りがけに玄関の手水鉢の台に目を注ぐと、なんと曲直瀬正淋の文字がはっきりと刻まれていた。正淋の墓石は手水鉢の台に転用されていたのであった。あきれ果て弔う者のいなくなった墓はこのように寺では扱われ、時には境内の片隅に積み上げられたり、石段に転用されたりするようである。曲直瀬正淋の活躍した安土桃山時代から四・五百年も経てば仕方のないことであるかもしれない。しかし初代の曲直瀬道三の墓所は京都市上京区の十念寺にあり、二代曲直瀬玄朔の墓所は東京渋谷の祥雲寺にあるにもかかわらず、玄朔の嗣子の曲直瀬正淋となればこのような有り様かと寂しく思われた。こうした先人の遺跡を訪ねて歩くのも医学史の研究の一つなのかもしれないが、何か過去ばかりを振り返って新しく見出すものがないような気がして次第に離れるようになっていった。

金沢での仕事を辞め医師の第一歩を始めた京都に戻り、漢方医学を学んだ聖光園細野診療所で再び漢方診療に専念するようになった。細野診療所の創設者である故細野史郎先生は昭和二年に京都帝国大学医学部を卒業され、当時肝臓疾患の研究や治療に全国的に名の通っていた松尾巖内科で博士号を取得されていた。先生は京都北部の農家の出身で、幼い時に母を化膿性髄膜炎で亡くされ、母親のような病気を治せる医者になりたいと思って、苦勞を重ねて一流の医学を身に付けて医者になった。しかし実際の臨床では昭和初期の西洋医学的医療は不十分で漢方医学の方が確かな効果を得ることが判り、漢方医として医療に取りくまれるようになった。先生の書齋は四方の壁が本棚になっていて、漢方の内外の古典書籍がずらっと並べてあった。先生の書齋を訪れていると質問

をすると、ときには書棚の古書を取り出しては、ここにこうあるなどと示してくださることがあった。漢方を学ぶものとしてそのような古典書籍を手にとって見るができるのは羨ましく思った。幸い京都には古書店が多くあり手に入れたい古書を求めて寺町通りなどを訪れていた。ある名のある古書店に手に入れたい本があるか尋ねると、今は持っていないとの返事で、「この頃は東京の古書店が古医書を買ひあさるのですぐになくなる」ということであった。「ところであなたは何処の漢方医さんですか」と尋ねられたので、聖光園細野診療所だと答えると、「ああ、細野さんですか。あそこは古医書を次々と買いはりますが、一向に手放してくれはれしません。買うてばかりですわ」と言われた。そう皮肉られながらも貴重な古医書を手に入れることができた。また母校の京大医学部図書館で所蔵されていた富士川文庫の古典にも触れたり、複製したものを手に入れたりして学んでいた。

富士川文庫は今日ではWeb検索でき、無料でダウンロードできるようになり大変ありがたいことである。今日漢方医学の解説書は優れた書物もありふれた解説書も多く世に出回っているが、私が漢方を学んでいた頃はやはり古典の医書を紐解いて勉強することが多かった。今日の漢方医はあまり古典に触れることが少なく先人の貴重な経験などを知ることもなく、自己流に解釈したり、臨床経験を語ったりすることが多い。特に漢方医学の原典は後漢時代に作られたといわれる「傷寒論」「金匱要略」であり、その内容をしっかりと理解することから始まるとされるが、「傷寒論」を読んだこともない漢方専門医がいて、傷寒論の処方を用いて自己流の解釈をしていることが見られる。

「傷寒論・金匱要略」の元本は失われ後世の加筆・改変も多いが、日本の漢方医達はできるだけ元本に近いものを求めてきた。そのような方面の考証も意義あることであろうが、漢方の臨床に携わる者にとっては、「傷寒論・金匱要略」を形作る医学体系こそ重要であり、それは「傷寒・金匱要略」を全体を見わたすことができなければ得ることができないことである。

漢方医学でもそうだが、一般の学問でも原典を紐解くことは重要であると考え。解説書の孫引きやましてWeb上からの引用などは私には受け入れ難い。特に医史学では自ら手間をかけて原典に接し、そこから自分の眼で事実を見いだすという姿勢が重要ではないであろうか。

日本の江戸期の江戸医学館での考証学派の人々が、中国の医書を綿密に考証して復刻していった業績はわが国にとっても中国にとっても特筆すべきものであったと思われる。小曾戸洋氏が指摘されているが、現代中国で復刻された古典医書は多くが日本の考証学派の人々の復刻版を基にして作られたものである。近年中国や台湾で復刻された古典医書は安価で手に入りやすいので買い求めてみるが、誤字、脱字、時には一頁ごと脱落しているものがあるので、よほど注意しなければならないし、文献として取り上げることもできない。わが国の先人達の考証の正確さや緻密さには目を見張るものがある。

こうして漢方医学の古典籍に触れるうちに、自身が漢方の臨床を実践している立場から、江戸中期の京都の名漢方医である和田東郭の「蕉窓雑話」に注目するようになった。和田東郭(泰純、含章齋)は摂津高槻の医家の出で、後に皇室方々の診療をし、中宮の皇子誕生にかかわって法眼にまでなった名のある医者であった。文字では自らの意図が伝わらないとして、「導水瑣言」以外は著作を残さず、門人達の手で東郭の書物が残された。「蕉窓雑話」も東郭の口述を口語体で書き残された治療書である。

若き時代に伊丹の竹中節齋、大阪の戸田旭山に後世方医学を学び、後に京都の古医方の吉益東洞に入門した。入門のきっかけは東洞の腹診を学びたいと願い出たが、門人でなければ教えられないと断られ、仕方なく入門し晩年の東洞先生の腹はさぞかし養生の末見事な腹であろうから是非診せてほしいと願い出たが、あれこれと他のことにまぎれて診せて貰えなかった。それで東洞先生とは袂を分かった。しかし臨終のときに診させてもらった腹はきっと二本棒の張った見事な腹であったと記している。吉益東洞も豪傑で頑固であった

が、和田東郭はそれにもまして積極果敢で物事の本質を見極めようという性格と見受けられる。

「蕉窓雑話」には多くの治験例が記されているが、その治療態度はどのような地位の高い人でも、遠慮やへつらいなどなく、病を治すに誠を尽すという基本の姿勢を貫いて果敢な診療を行っている。また文字では意図は伝わらないと雖も、その治験例には和田東郭の真骨頂がうかがえる。

ある大阪の裕福な商家の後家で、歳は三十一、二、身体にどこといって悪いところはないが、くるくると眩暈がして立つこともできない。大阪中の名のある医者に治療を受けるも治らず。大勢の侍女を引きつれ船にて京都伏見につき、京都三条の和田東郭近くの宿に借り、往診を依頼してきた。ゆくと布団を高く重ね、枕を高くして横になり挨拶してくる、診察をするに顔色脈腹に衰えなく、体もつやつやとし肥っていて、虚弱とも血の病とも癩症とも痰飲の病ともみえない。東郭はこの病は他でもない「甚だ驕りの長じたる処から起るものだ」と告げる。

それを聞いてこの病人は、「若い後家なれどさしたる驕りをした覚えはない」と立腹する。それに対して東郭は「貴女のいう贅沢をしたり遊興に耽ったりということを行っているのではない。このような裕福で不自由なく暮らせるのは、貴女の先祖の昼夜千辛万苦の働きによるもので、その恩義を忘れて、今日明日働かなければ食うものがない者なら、そのような目が回るなどいってはおれない」と強く論説し、今より不了簡を止めて立って歩く気になればできると言い、ついに座敷の中を歩かせた。以後益暮れには大阪より必ず挨拶に来るようになったという。

時代も違うので同じような診療のやり方が今日可能とは思えないが、病者を治療するにこのような真剣なやり取りができる真摯な医療人たることを教えられた気がする。よほど優れた観察眼と治療に自信がなければできないことである。東郭は医療というものは成書に挙げられた症候に従って治療するのを死法といい、病人を詳しく診察して形法則にとらわれず、「何が故にかくなるぞ」という処を推し尋ねて治療するのが活法というもので

あると述べている。

和田東郭は吉益東洞と腹診に関わることで袂を分かったと述べているが、東洞の葬儀には羽織袴で行列の提灯持ちを担っている。自らの医学観と吉益東洞の新しい医学観とは異なるが、やはり深い尊敬の念を持っていたのではいかと思われる。吉益東洞は頑なな古方派医学で和田東郭は柔軟な折衷派医学を実践したというような定型的な見方で捉えるのではなく、それぞれの医療の実践の中からその姿勢を学び取ることが大切のように思われる。

1970（昭和45）年京大医学部を卒業して学生時代から20年近く過ごした京都を離れ、1985（平成60）年に故郷の広島で漢方診療所を開設することになった。広島の地は日本医史学会創設者の呉秀三先生、富士川游両先生の出身地であり、さらに日本での古方医学の確立者である吉益東洞の出身地でもある。医史学では元広島大学学長の原田康夫先生や産婦人科の故江川義雄先生が活躍されておられた。一方吉益東洞については広島漢方研究会の元会長であった故小川新先生が、吉益東洞顕彰会を広島医史学研究会とともに毎年9月に開催されていた。

吉益東洞顕彰会は古くは大正12年（1923年）に没後150年忌（1773年没）を、広島出身の呉秀三先生、富士川游先生らが芸備医学会で顕彰記念会として開いている。そして、東洞没後200年の1973（昭和48）年には、広島県医師会が顕彰委員会を立ち上げ、ブロンズ座像を作製し、全国から集められた遺墨および画像を展示し、広島県医師会館に展示・陳列して、郷土の偉傑を顕彰した。

その翌年（昭和49年7月）、広島の漢方家の医師・薬剤師達で成り立っている広島漢方研究会（故小川新先生会長。昭和34（1959）年設立、現在は山崎正寿会長）が、全国の漢方家の賛同を得て、吉益東洞ゆかりの広島市寺町の報専坊に顕彰碑を建立した。報専坊は若くして京都に出て苦学した東洞先生と同郷の浄土真宗の碩学の名師・慧雲が住職をしていた寺である。慧雲師は京都時代に東洞から何かと援助受けている。顕彰墓碑は故大塚敬節先生の揮毫によるものであった。以来毎年9

月、広島漢方研究会有志によって、報専坊にて仏式の回忌が続けられていたが、故あって顕彰碑を移転しなければならなくなり、故小川先生を始めとして大変苦慮した末、当時の広島大学医学部出身の広島大学学長であった原田康夫先生、産婦人科の故江川義雄先生などのご尽力を得て、広島大学医学部創立50周年記念行事の一つとして、1995(平成7)年9月10日に広島大学医学部基礎棟前に吉益東洞顕彰碑が移転建立された。新しい顕彰碑建立に当っては全国から発起人寄付が寄せられた。

吉益東洞の顕彰碑が広大医学部内に決まって以来、毎年9月の第2日曜日に、広島医史学研究会と合同で、東洞の顕彰会が開催されるようになった。平成16年、故小川新先生が亡くなられてから、広島漢方研究会(会長・山崎正寿)が主体となって、広島医史学研究会とは別れて東洞顕彰会を開くことになり、日本医史学会、日本東洋医学会、東亜医学協会などの後援と日本生薬学会の共催をも得て開かれるようになり、吉益南涯(東洞の嫡男)の七代目に当たられる故吉益暢夫先生(兄)や吉益倫夫先生(弟)も時々参加され、東洋医学会の故伊藤清夫先生、故山田光胤先生、故寺師陸宗先生、松田邦夫先生なども特別講演をしていただき全国的な広がりを持つようになった。また今年(令和4年)から日本東洋医学会中四国支部が主催、広島漢方研究会も共催として開催されることになった。

私自身も吉益東洞につき研究をするようになり、特に呉秀三先生と富士川游先生による芸備医学会発行の「東洞全集」(大正七年、思文閣出版発行)が昭和四十五年に広島県安佐医学会の有志によって復刻されたことで、詳細な吉益東洞の経歴、その思想、著作、門人たちについて知ることができるようになった。吉益東洞についていくつかの著作物があるが、私は呉秀三先生・富士川游先生のこの「東洞全集」を越えるものはないと確信する。

平成28(2016)年6月、前日本医史学会理事長の小曾戸洋先生の推挙により、第117回日本医史学会総会・学術大会を広島市にて開催するよう

言い渡され、不肖私山崎正寿が会長を務めさせていただいた。広島医史学研究会の先生方はじめ近隣の先生方の協力を得て開くことができた。「吉益東洞ほか、広島県の先賢の事蹟」というテーマで、漢方医学の日本独自の潮流を作った吉益東洞、また日本医史学会創設者の富士川游先生、呉秀三先生のご業績についても触れることになった。富士川游先生については御孫さんにあたる富士川義之東大名誉教授のご講演、呉秀三先生については青柿舎の岡田靖雄先生が、広島県の生んだ名眼科医の土生玄硯については京都の奥沢康正先生が、また福山藩の伊澤蘭軒らの考証学派的藩医たちについては二松学舎大教授の町泉寿郎先生がそれぞれ講演をされた。会長の私山崎正寿は吉益東洞と瀧鶴台の交友関係から東洞の医学思想の背景について講演した。

吉益東洞については先に触れた「東洞全集」(呉秀三・富士川游編集校定・思文閣出版)に詳細に述べられているので、改めて詳しく触れる必要もないので、東洞が当時としてはそれまでの漢方医学のコペルニクスの変化を生んだ主張の思想的な背景に触れることにする。

吉益東洞の漢方医学の主眼は当時主流であった後世方医学(金元時代の医学)を否定し、後漢時代に著わされたという傷寒論・金匱要略の医学に復古することであった。そしてその主張の二大要点は「万病一毒」と「親試実験(実試親験)」であった。これらの主張は、京都に出る前の若き広島時代に自ら古典の医書や史書から学び得たものであり、「万病一毒」説は中国の「呂氏春秋」、「史記の扁鵲伝」或は「傷寒論」などより導き出した医説である。また親試実験も中国の秦越人・扁鵲の診察のやり方から学び、当時主流であった陰陽五行説にもとづく後世方医学を「臆見に満ちて治療の邪魔になる」と否定して、事実以上に立った医療こそ大切であると主張した。このような医学の復古主義は中国でも明末から清始めに起こったが、あくまで陰陽五行論から離れることは出来なかった。吉益東洞が初めて陰陽五行論から離れた医学の復古主義を主張したことはわが国独自のものである。

こうした医学上の復古主義は医学だけにとどまらず、江戸時代の思想の主流となった儒教にも見られることであった。徳川家康開府の際の思想的背景になったのが、僧侶から儒学者になった藤原惺窩、その弟子の林羅山らによる朱子学である。後に昌平坂学問所で官学として広く教えられた。朱子学は中国宋代周濂溪、程明道・程伊川らによって開拓、発展された宋学を、朱熹よって、孔子の教えを理論体系化したものであり、四書（論語・大学・中庸・孟子）を重んじて、理気二元説、性善説などを説き、修身齊家が治国平天下の基礎であるとし、公式主義、厳格主義、教条主義などと解される。所謂、宋儒学派である。

こうした初期の儒学に対して、徳川幕府も進んだ頃に、京都の伊藤仁斎・東涯が孔子・孟子の古義にもとづく儒学を主張し始めた。朱子学のいう性善説・完全善を否定し、人間の個性や主体性・多様性を認め始めた。「仁」は慈愛の心であるとし、我邦、独創の儒学を生み出した。いわば幕府の官学から、町人の哲学であり、武士だけでなく公家、町人、医者などにも多くの賛意する人々を生んだ。所謂、古義学派である。

この儒学の古義派に対して更に荻生徂徠は、朱子学の理を重んじ、議論に終始する儒学から、中国の周から前漢までの古言（古文辞）は、宋を中心とする後代の文章語とは根本的に異質であり、古代の「心」を得るためには、古言を尊重すべきであるとした。古文辞学派とも呼ばれた。古文辞は詩の言語に通じ、古文辞に現わされるものは事実そのものであり、古代の事実は人間の事実の原形であるとし、六経（易・書・詩・礼・春秋・楽）と論語を重んじた。そして修身齊家は私的なもの、治国平天下は公的なものと区別し、徳川綱吉、柳沢吉保、徳川吉宗などに尊重され、徳川幕府中期の武家の主要な思想となった。護園学派とも呼ばれ、安藤東野、山縣周南、服部南郭、平野金華、太宰春台など優れた弟子をもち、徂徠没後も徂徠派は隆盛を誇った。

このような朱子学から古義学、古文辞学と変遷した儒学は、後代（宋）に創作された孔子の教えの理論化から、改めて本来の孔子の教えに復帰す

るという、いわば復古主義の流れを作り出し、またその実証的精神は儒学に止まらず、多方面に影響を及ぼしたといえる。特に古文辞学派の荻生徂徠の古言（古文辞）を重んじる態度は、まさに吉益東洞の古医方の考えと相通ずるものがある。東洞が古医方を主張する前から古文辞学とつながりがあったかどうかは、調べた上でも明らかではない。むしろ東洞は京都の朱子学者の堀景山を頼って上京しているので、古文辞学派の人々とは始めは無縁ではなかったかと考えられる。堀家は代々安芸浅野侯に仕えた儒学者で、堀古庵は朱子学の藤原惺窩の弟子である。したがって吉益東洞も朱子学派との関係が推測されるが、後に朱子学派より古文辞学派とのつながりが明らかとなっている。東洞の親しい友に長州の瀧鶴台（瀧弥八）がおり、東洞46歳頃に「醫断」を著わした時にその序文を書いている。この頃は京都の名医山脇東洋に認められて、盛業となって京・東洞院に新しく居を構えた頃である。

瀧鶴台は吉益東洞より7歳年下で、長州萩藩の大工の子として生まれるも、学問好きで、請われて御客屋付医師の瀧養正の養子となり医術を学ぶも、14歳で萩の明倫館に入学、当代一流の学者である小倉尚斎、山県周南について儒学を学んだ。萩藩家老毛利広政の下で時観園の教授を拜命。更に江戸遊学となり、山縣周南の友人でやはり徂徠学派の高弟服部南郭に入門。その後瀧鶴台の名は江戸に於いて高名となり、山縣や服部の同じ徂徠学派の太宰春台には、「西海第一之才子」と賛辞を受けた。その後長崎に遊学したり、再び江戸に出て、米沢藩の上杉鷹山や大和小泉藩の片桐貞芳には師として講義を行った。儒医としても「宋後の方論をいさぎよしとせず、ひそかに古方を左祖するもの久し」と述べ、早くから古医方を行っていた。京都滞在中には香川修庵、山脇東洋、吉益東洞と親しく交わっていた。東洞は瀧鶴台との手紙のやり取りのなかで、「世の人は私の医説を聞いて、面諛腹非す。一人として與語すべき者無し。足下の如きは知音と謂うべし」と述べて東洞の真の理解者とまで言っている。こうした古文辞学派人々との交流のうちに、瀧鶴台の師である長州萩

明倫館の学頭であった晩年の山縣周南先生に、東洞は自らの医学観の根底となる思想についてその是非を聞かせて欲しいと次のように問いかける。

「初め僕、劉張李朱の術を為す、而るに病治せず。乃ち更に王燾、孫思邈を為し、仲景を為す、而して猶お未しなり」と述べ、これらの医経を離れてみると、「是に於いて古今治の異とするを知る。乃ち古訓を学び獲る有るを信ず。遂に古を好む」と述べ、「故に素靈中の古言、及び秦漢以上の醫語を撰び集め、治と道を同じうして、亂と事を同じうせず。古を用いて今を御す」そして「二千年来祖述憲章すべき者無し。遂に乃ち我より古を作る。僕甚だ焉に惑す。儼は所謂古訓に由って是非か」迷うところであるが、「徠翁先生、其れ古訓に由らざれば法言に非ず敢て道ならず」と言われている。山縣周南先生には庶幾は高明一顧、直ちに其の是非を指示し、我れ僞小人と為す、齒牙の餘論を奮む無きを幸甚とす」という書簡を送っ

ている。

荻生徠の古言（古文辞）を重んじる思想と吉益東洞の古言をもとに古医方を作り出した考えとは相通じるのではないかというのである。山縣周南先生がどのような返答をされたのかは今のところよく分からないが、周南先生はご自分の病の診療を東洞先生に託したりされて親交を結ばれたことから、恐らく東洞の主張を是認されたのではないかと想像する。

吉益東洞の研究により単に古医方を復活した医人というよりも、中国・韓国にもない日本独自の漢方医学を生み出し、今日の日本漢方の礎を創り出した英傑であると考えられる。また吉益東洞や和田東郭の診療姿勢やその思想について詳しく研究してゆくことから、今日漢方医療に携わっている者として、大変示唆に富んだ事柄を学ぶことができたように思われる。医史学の研究にはこのような利点があることに気づかされた。